

192

こんにちは。塾長の大井です。

前回のつづきです。

まずはYさんの話です。

「私は桜蔭中に失敗して公立に行ったのですが、落ちてから初めて自分は授業を完全に身につけることができていなかったことに気づきました。

だから、高校受験でも大学受験でも、とにかく習ったことを完全に身につけることにこだわりました。

完全に身につけるとは、得点できるようになることです。

その結果、今東京大学に通っています。」

その言葉からはひとかけらの自慢も感じませんでした。強い自負は伝わってきました。そして、彼女がそう言えるまでどれだけの努力の日々があったらろうと思いました。

「私はその大切さに気づくのに中学受験での失敗が必要だったけど、みんなは今気づいて合格を勝ち取って下さい。」

Yさんの言葉は、さっきの謙遜した様子とはまるで別人のように力強い

ものでした。

次は全部の授業が英語という医学部に進んだTさんからです。

「私が勉強をやる時に心がけたのは、質の高さです。ある問題について習った時、その問題を解けるようにすることだけでなく、同じような問題、似たような問題も全て解けるようにしました。

JGではみんなやっていないと言いますが、できる人はみんな質の高い勉強をやっているのを感じていました。」

問題を教えるではなく、問題で教える。

それはいつも私たちが授業で伝えている、学ぶことの醍醐味です。彼女の言葉を聞いて、誰よりも学ぶことに誠実でひたむきだったあの日々のことを思い出しました。

2人の話を聞いて、2人が自分を人一倍客観視してきたのが伝わってきました。

そして、勉強に注いできた長い歴史と想いが報われ、彼女たちの中に確かな芯として宿っているのを感じました。

(立派になった。)

彼女たちの話を聞きながら、私の胸にも込み上げるものがありました。

たかが受験、されど受験。

そこに注いできたものが、また先の未来を拓いていく。

TOPの子どもたちにもこうあってほしい。

彼女たちと久しぶりに共にしたのは、そんな想いにさせてくれたとても濃密な時間でした。

2018年10月8日

大井雄之